

888 報新濱横

り
ほ
ま

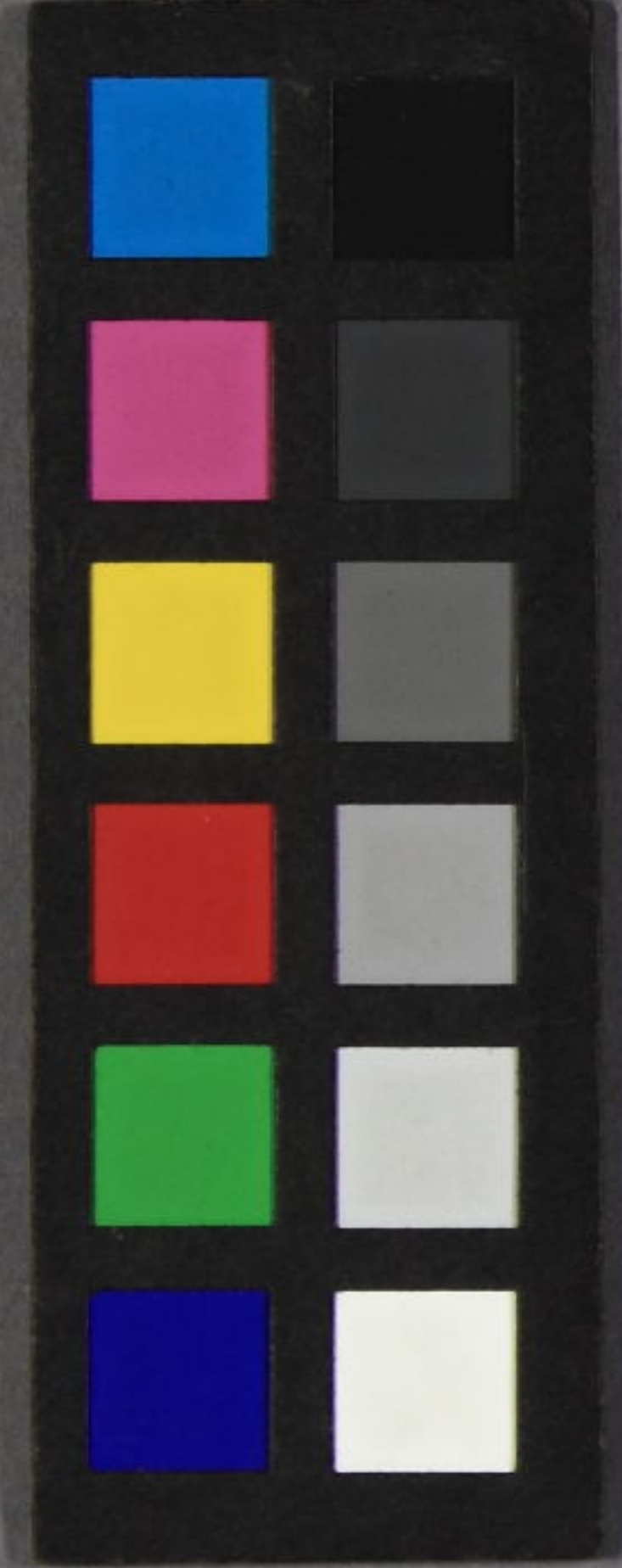


茅四編

九十三番

ツエシリート

定價壹匁



特 文庫 10
7388
4

新報

第四卷

おのゝ

K2V20M

宝貫堂

横濱新報

十六日

一月づき第四

慶應四年戊辰閏四月廿一日

○滑耀先生日記のつぎ

西垣文庫

朝五時ごろより會津兵と稱し〜百五十人むをり
結城へ打入り鑊砲をうちつけし官軍とありも
人數をり出〜た〜ひ〜に會津兵あり以
敗走しられバ官軍勢に乗トて竹井村といふ處まで
追掛ありが伏勢四方よりあり立〜鎗鋒を
そろて突〜か〜官軍あり以狼狽〜や
やく一方をきりぬけて縮川をわ〜開本といふ

處まどみげのびてちりくぐふちりたる士卒を
まとの志をくくつれをほぎつるに陸軍隊の兵
あつのにあしめて下齊の鑊砲をうちあはれば
官軍ひとたまりもるまらば敗走し歡喜院まどび
ふ名主七九郎が宅其外民家の火をのけてその
ひまに船主といふ處まどみちのびりかたつら汗
戸脱走の兵よせあること又く絹川をくさる久保田
村の火をのけ其まどみ結城を通りぬき夜乃
五時をぬふ小山の驛ふりてやどりたる
○十四日は栗橋を敗軍したる官軍の手負死

人せけふ真壁の陣屋へをどびたるこそ

十七日

きのふ打ちとせきたる井伊藤堂の兵あちとち
より小山へつりたる處に朝四時ごろ一手の關
東勢驛外まであしよせく時の聲をひききたる
せいとせけし官兵よりも鑊砲をうちあはし
たつひけるが官軍は且たつひ且退きまらば
驛の東の麥畑の中まら追のけゆれて一時むら
ほどをけしきたつひつりあつるころに壬生より
加勢の出しは官軍是ふ力を得てとえたりたる

に八時過とあがしれたる東照宮の旗をおし立
 て關東勢あびさるくあきまきりければ官軍大
 敗走し木沢の人家へ火をうつりてとどまらぬ
 本城さして逃あがりるるぞ壬生勢ハ先手の大
 將と打ちあはせしむるもさうはあちぬれたる
 が石橋驛にぞまゐるも何り宇都宮まであちのびぬ
 も何り倒あしたる手負死人其数もるべしは叔
 關東方ハ夜五時をりに小山の宿へ引あらし
 分捕したる品を點檢しるに錦の旗一流井伊家
 紋の旗二流木砲十四挺小筒七挺鎗十七本馬四疋

白米二百俵金四千五百兩生捕七人關東勢討死
 五十六人その内あらしだちるりの二人を葬りて
 手負を令抱せしむるも支度さめぬ
 けまばあねしう夜の内に宇都宮へ押寄る殘
 兵どもをあひあらしむる先さしたれをぞ御
 けるが九ツ時とあほしれたる關東勢のさした
 小山を引あらしむる太平山へぞめぼりたる
 ○今日東照宮の祭禮をさしむる徳川家結
 旧臣も昨日生捕たる井伊家の兵の首を切り
 て日光山へ持行く神前にそまゐるるを

○今日仙臺をめぐびに薩長の兵と會津を打
こく土湯越とのみ處まゝに中向りに會津より
防の兵を出し嶮岨の間になごひるるが仙
臺勢敗走めより風聞なり

十八日

きのふ討死する官兵の死骸石橋と小山の間に
よそよりて算木をまたちりたるが如くたゞ
ごもたきとりをぐるものもたけいふをこま
にのさるるより風聞あり叔官軍宇都
宮ふりつまりるよりをきく諸方ふ集り居

たる關東勢ひそくに襲撃の用意をとな
るりある

十九日

大平山小籠り居たる彰義隊貫義隊太久保
黨會津勢等其外諸家の脱走人都合三千七百
余人早朝より宇都宮城をとりかこむ攻りるが
たろぐにたごひふもたろぐより一鎮守明
神の社とく少く小高所なりを彰義隊
の兵ども大砲数挺を其上に引あけて無二無三
打立りて城の内外一圓ふ火焰となりる官

四十四

四

軍大敗走しつるが城主戸田某も討死しつる
らむいひ又關東方へ降參志ありとむりつり

二十日

昨日ゆふこゝろに宇都宮落城したりは是を關
東勢四千餘人夜の中に城へ入りあそりて東照宮
の旗日の丸の旗數十流あしなせり今や敵乃
寄せくるものと待居ありあるに官軍へ木半南
をさしりて落行りつるときてさうぢこまよひ
壬生へおしよせ其罪をたがはずべしとて城に
守の兵をのこしおれ九時をりりに三千餘人あて

くりおしたり

○きのふ生捕たる土州の參謀あつらひに彦根
壬生の陣代の首をきりて獄門におもたりける
三百年未徳川家の恩澤を蒙りたるが敵對
いしゆ者につれ梟首ふ物とあるふのあり

○廿一日よりききおの第五篇に加へ引はき出板

○雜報

母子日

五

○八王子よりききぬることは結めはるゝに驛きのちう
 びるの榜示ちうしに 天朝御領てんてうごりやう 汗川太郎左衛門支配所あせがわだうざゑもんしはいしよと
 一か所はあてたせりけるを彰義隊ちやうぎたいの者ごとにあ
 たりてけり

○十三四日のち後 彰義隊のめの三百六十人をり八王
 子へりりる驛の東西の口に關せだをすゑる西國武士さいこくぶし
 とあはしきまのせえればあつてさうさうとせりあひ
 たりあをきりてあひやりありたがびとをときさむ
 しくつたあつてさうさうとせりあひ

○八王子の千人同心ちせんどうしんも日光山の番ばんに毎年まいねん五十人
 づつ六月朔日ろくがつしやくにちふりりつるにたる例れいあり此月初このつきはつの頃
 日光山を官軍にのりさうして五十人のちはさむ
 八王子へあげあつてあるをぞ

○この十七日ふあつてさうさうの官人くわんにんきさうれり下人の
 モニテモニテひりりバアセレーとて江戸家の柳やなぎをさうさうあ
 るとのちうあるとのあり

○横濱よこはまの集會所あひまひしよといふのちと江戸家のち好商こうかうぶ
 奸吏けんしとなれりひその奸けんをほしひまにせんらめには
 たる所ありこのちち舊弊きうへいを一洗いちせんせりせりりり
 たるはちがあの所をぞさうさうとせりあつて昨日きのふ其奸魁けんけい

たる石炭屋多右衛門茶屋勘助芝屋祐次郎等を搦
 捕とらて裁判所さいばんしょの獄ごくにとめらるるをききこれまを
 日本にっぽんの商人しょうじんのほんとうの利益りやくをいせしたるゆゑを
 ゆゑに商法しょうぼうを考へてみづりに私法しりつぼうをたてし中
 間ま或あるのあぶなとを称ししゆゑをいひのせまくあるやうに心を
 めらるるありこれいおの違ちがひをりめて利りを志しめんとの奸ねより起おこ
 るゆゑをいはるるがおほやあなうぬりありさのまひか
 王政おうせい御一新ごいつしんの時ときいひてある活習かつしゆとのぞきおひまがら
 おほふふふは繁榮はんえいの基もとなるべしと西洋せいやうの人ひとよりいひ
 けり

5

5

西垣文庫 特
文庫 10
7388
4